

種・仲間統種・如法寺氏らが秋月文種に呼応して、築城郡の城井左馬助（信義か）の宅所へ押し寄せ、放火して退却した。この時の合戦で、城井左馬助方は仲八屋衆の首二、山田衆の首一三を討ち取り、これを玖珠郡まで出張していた大友義鎮のもとへ送った。城井方に加わって防戦した八屋衆も七〇人ほどの負傷者を出した。大友義鎮は、宇佐郡代佐田隆居に山田隆朝との和睦の斡旋を依頼して、隆朝の子息万千世を佐田方に預けるよう説得させたが不調に終わり、豊後北浦辺衆（国東郡衆）の一万に近い大軍を豊前に侵入させた。

広津城の合戦

六月朔日、武蔵田原親賢（のち紹忍）・木付鎮秀が妙見岳城に入り、大内方の城督杉因幡守隆哉は下城して広津城に入った。杉隆哉はのちに犀川町大村に住みその城が因州城と呼ばれた。六月十八日、山田勢が広津城（吉富町）に押し寄せ、籠城していた佐田隆居ら宇佐郡衆、野仲鎮兼ら下毛郡衆との間に戦闘が行われ、翌日までに、山田方は戦死一〇〇、負傷二〇〇人を出して敗退した。二日後、国東の田原親宏軍が到着し、山田城を攻めて、上毛郡一帯を焼き払った。山田安芸守は山中に姿を隠し、残党狩りで八〇〇余の首が挙げられ、女人も略奪されて、上毛郡の男女の四分の一が逃散したという。山田隆朝の長子万千世丸（十一歳）は下毛郡の秣刑部に捕らえられ、その首を田原親宏へ差し出された。親宏は玖珠郡へ出張している大友義鎮のもとへこれを送って感状を得た。山田安芸守は防長へ渡り、毛利元就に仕えた（『西郷』）。

馬岳落城

田原親宏らは軍を仲津郡に進め、七月四日、馬岳城をたちまち攻略した。秋月方の城督ヨシカイ、皆木甲斐守以下一〇〇人ばかりを討ち取ったが、田原方も松木・萱島の家来を

失った（『永弘』）。

佐田正忠隆居も馬岳小城切岸の合戦に活躍し、感状を得た。

今度馬岳小城切岸において、最前より御放戦の趣、比類無く候、殊に小城調略の儀、御一人の御才覚、他に異り候、御粉骨の次第、注進を遂ぐべく候、恐々謹言
（弘治三）
 七月九日
（田原）
 親宏（花押）

佐田正忠殿

御陣所

（原護文）

田原親宏軍はさらに筑前千手・馬見表へ越山して、秋月文種の楯籠る古処山を背後から攻めようとしたが、その前に、古処山籠城者に裏切る者が出て、七月十一日落城し、秋月文種は自殺、その子三人は姿を隠し、のち中国の毛利元就のもとに匿われて成長する。

この年九月には、大友義鎮による豊筑の国盗りが完了したらしく、豊後より九人の検使が派遣され、闕所地の摘発が行われ、これに基づいて、恩賞が発表された。

二 西郷隆頼の挙兵と門可城争奪戦

大友 義鎮 永禄元年（一五五八）六月、田原親宏は再び京都郡へ

九州探題に 出陣し、さらに小倉で首二八〇を取って築城の別府へ帰陣した。前年の検使の入部に反発して挙兵する者があったのである。永禄二年正月、龍造寺隆信は、少弐冬尚を攻めて自刃させ、少弐氏は消滅した。この年六月、大友義鎮は幕府へ莫大な献金を続けて、豊前・筑前・筑後の守護職に補任され、四か月後、さらに九州探題職・大内家督・周防・長門守護職までも与えられて八か国の守護職に任じら

れ、三十歳にして得意絶頂に達した。

この時期に、西郷遠江守隆頼が挙兵した。『佐田文書』によると、

永禄二年八月廿二日、西郷遠江守要書攻口において、佐田彈正忠隆居の人数、分捕高名の次第著到、銘々披見を加えおわんぬ

類一 西郷弥三 遠江守弟 平郡彦次郎討之
同一 田平原五郎 弥三郎討之 (以下略)

と、佐田方は首四を取ったが、被官・従僕の負傷者一八を出した。

『大友家文書録』には、このころの情勢を伝える次の史料がある。

去る廿二、西郷遠江守の要害にいたり取懸けられ候の刻、親宏の人数、或いは分捕り高名、或いは疵を被り、戦死の趣、著到銘々披見を加え、袖判をもつて申し候、度々に及ぶ粉骨の次第、御太忠誠に比類無く候、その辻をもつて過半その国案中に属し候、祝著に候、然らば、門司・花尾・高春岳は未だ落去せざるの由候条、親賢申し談じられ、残党足を抜かざるの様、打果さるべき事、頼み存じ候、殊に筑前日の儀、方々勝利を得候の条、そこ表、いよいよ差急がること肝要に候、なお志賀安房守・臼杵四郎左衛門尉よりも申すべく候、恐々謹言
(永禄二) 八月廿六日 (親宏) 義鎮在判 (大友)

田原常陸介殿

(原漢文)

毛利元就の調略

秋月文種が滅び、豊筑が平定され、検使が入つて、旧大内氏の給地が大友家家臣たちに預置かれ

たあと、知行地を失い牢人となった豊筑の国人は、毛利氏の調略によつて、大友氏に反旗を掲げたが、小倉の長野氏、西郷隆頼の要害(不動ヶ岳カ)が攻略され、豊前の大半は平定された。しかしまだ、門司城(波多野興滋)・香春岳城(杉連緒)・花尾城(麻生隆実)が落城していないので、急いでこれらの城を攻略せよという内容である。九月二日、両田原

賢)氏は、佐田隆居・安心院興生兩人を馬岳城番とし、門司・花尾攻略に向かった。九月二十六日、両田原軍は門司城を攻略して、落ち行く城將波多野大和守興滋父子・同兵庫・須子大蔵等を討ち取った。門司城には怒留湯主水を城番として帰国したらしい(『文書』)。門司城を占領された毛利方は、あるいは降参し、西郷隆頼らは、中国の毛利氏を頼って亡命した。『西郷文書』の次の史料がそれを語っている。

今後、旁儀、此方御取退き、もつとも本望に候、両国弓矢の儀、是非共来春存し立つべく候条、諸境目の事、内々御調略肝要に候、なお、山田安芸守方より申さるべく候、恐々謹言
(永禄二) 十一月十日 (毛利) 隆元(花押) 元就(花押)

西郷遠江守殿御留所

(原漢文)

ここでは、来春、豊芸の戦争を計画しているから、境目の国人たちへの調略を山田安芸守と統けていってもらいたいと述べている。

永禄三年十二月、毛利元就は、大内家の奉行衆であった仁保右衛門大夫隆慰を渡海させて門司城を奪回させ、規矩一郡の給人領・寺社領の代官とした。

豊後勢の門司城包囲 永禄四年正月、大友義鎮は、吉岡長増・臼杵鑑速の二家老に三万(ある説は一万五〇〇〇)の兵を付けて門司

城へ向寄せた。これを聞いた毛利元就も、二月、小早川隆景に村上水軍を付けて一万二〇〇〇(あるいは一万八〇〇〇)の軍勢を渡海させて門司城を海陸より支援させた。

そのころ、毛利元就は出雲の尼子義久攻撃に熱中していたため、門司城へ十分な兵力を送ることができなかった。大友義鎮としては、この

間隙かんげきをついて門司城を押さえ、叛服定まらない豊筑の国人と毛利氏との繋りつなを断ち切ろうとした。豊後勢は、この年九月ごろまでに、香春岳城（杉連緒）・花尾城（麻生隆実）・松山城（杉隆哉）等を攻略し、門司城攻めにかかった。

大友方敗軍

門司城攻囲軍は、十月末まで数回の合戦に成果なく、十一月五日、半年以上の長陣に疲れて撤退を決し、山を下り、赤坂・小倉を経由して貫山越えて彦山下を通り日田へ到着した。毛利水軍が仲津郡辺で道待ちしていると情報があったため、宇佐郡衆まで日田へ随従した。

国東の田原親宏勢は貫山を越えたのち二老の本隊と分かれて、黒田原・天生田・国分寺原を通って国東へ帰ったため、途中、毛利方の杉隆哉・野島・来島・浦兵部等の兵に追撃されて大痛手を被った。

この大敗にショックを受けた大友義鎮は毛利水軍の襲来を恐れて、臼杵の居城を大修築し、三十二歳の若さで出家して宗麟と号した。

三 松山城の攻防戦

門司城の敗戦から半年後の永禄五年（一五六二）六月、大友宗麟は、門司城奪還のために、再度大軍を豊前へ送り込んだ。しかし、今度は、菊田の松山城（標高二八〇）攻略が中心となった。松山城は、歴代の大内家守護代杉氏の居城であったといわれ、このころ、大友氏から離反した杉因幡守隆哉と杉重輔の子松千代丸（のち重良）がいたが、天野隆重を城将として送り込み籠城体制を固めていた。この城は東と北が海に面した崖で、南と西は深い湿地となっていたから、小さいながら、攻め



小倉側より見た松山城跡

るに難しい城であったらしい。

門司城では、大友方の猛将戸次鑑連や吉弘鑑理が攻撃を懸けて、大内一族の冷泉元豊以下の部将を討ち取る戦果を挙げたが散発に終わった。

高橋鑑種の変心

松山城で小競り合いが続いている間も、毛利氏から豊筑の国人たちへの調略は進められ、永禄五年の暮れには、大友宗麟の信頼が厚かった太宰府宝満城督高橋三河守鑑種が寝返った。これによって、毛利方は門司氏―麻生氏―宗像氏―杉豊後守連緒―秋月種実―高橋鑑種―筑紫惟門と博多・太宰府への通路を容易にした（荒木清一『毛利氏の北九州経略』と。国人領主の動向『九州史学九八号』）。

晩年を小倉城で過ごすことになる高橋鑑種は、大友一族一万田氏の生まれで、大友義鑑のとき、筑前の名家大蔵一族の高橋家を嗣ぎ、肥後の